

第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事の学」③

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第3節 「事の学」とは何か

南方熊楠は、ロンドン時代、霊媒師であり、世界の宗教・神秘学を癒合せ「神智学」を創唱したヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキー (1831～1891) の大著『ヴェールをはがされたイシス』を読んでいた。ブラヴァツキーは1875年に、ニューヨークに「神智学協会」を設立し、後にルドルフ・シュタイナー (1861～1925) にも大きな影響を与えたことでも知られている。ロンドンではオカルト研究を目的に英国心霊研究協会が1882年に設立され、1890年代には、公開交霊会が頻繁に開催されていた。オカルティズムが、近代科学のまさに勃興期、それと対応するように科学技術・合理主義的思想を批判する人たちが心霊現象やテレパシーの実験・研究・調査活動を行っていたのであった。

その頃パリにいた土岐法龍は、熊楠に「また「オッカリズム」。右は如何におこなわれ候や、これまた御尋ね申し上げ候。」との書簡を送っている。それに対して熊楠は「またオッカリズムのことは小生も少々読みしが、名ありて実なきよのことにあらずや。……」と批判的に答えている (唐澤太輔『南方熊楠—日本人の可能性の極限』中公新書、117～118頁)。ここではまず熊楠の「事の学」と称する言葉が初出する法龍への長文の書簡を引用しておきたい。この書簡は1893年12月24日記となっているが、12月21日午後7時に書きはじめ、書き終えたのが24日の午後3時という長大な書簡である。

小生の事の学というは、心界と物界とが相接して、日常あらわる事という事も右の如く、非常に古いことなど起り来たりて昨今の事と接して混雑はあるが、大綱領だけは分かり得べきものと思ふなり。電気が光を放ち、光が熱を与えるときは、物ばかりの働き也 (物理学的)。今、心がその望欲をもて手をつかい物を動かし、火を焚いて体を暖むるときより、石を築いて長城となし、木をけずりて大堂を建つるときは、心界が物界と雜わりて初めて生ずるはたらきなり。電気、光等の心なきものがするはたらきとは異なり、この心界が物界とまじわりて生ずる事 (すなわち、手を以て紙をとり鼻をかむより、教を立て人を利するに至るまで) という事にはそれぞれ因果のあることと知る。その事の条理を知りたいことなり。

電気や光は物の作用、さまざまな欲望は心の作用であり、両者がまじわる場が「事」である。つまり「事」たる場は、「心」と「物」の関係を成立させる「ところ」である「萃点」の原点と言えるかもしれない。熊楠は夢も「事」であると書いている。その説明に二つの楕円が重なり合う



ものを描いた (図)。そこには左の円に「心」、右の円に「物」、両円が交わる「ところ」に「事」と描いている。わたくしは今「事」があらわれる場を「ところ」あるいは「萃点」と書いた。書きながら「事」は、「物」と「心」が一つに合体したという場の意味においては、移動する諸「萃点」を、つまり因果律と因縁を包摂する「理」不思議の筋道を「このところ」という教語を連想しながら考えていた。熊楠がいう物不思議、心不思議、事不思議の全体をふくめた不思議を解くのが学問であるとする理不思議—その着想の筋道の行き着くところは、無数の「萃点」の

あつまり、つまり究極の「萃点」は人間創造・救済の場としての天理の「地場」であり、その「裏守護」の物、事、心の諸不思議の「見立て」を解説する手立てとして、南方曼陀羅的「事」化は天理教学としていかにして援用可能であるかという難問であった。「このところよろつの事をときゝかす 神いちじよでむねのうちより」「わかるよふむねのうちよりしやんせよ 人たすけたらわがみたすかる」(三一46、47)の「おふでさき」が包摂している「思案」と「たすかる」の「このところ」の空間的「見立て」による「事」創出についてである。「見立て」が事化された社会的現象はなかなか視野に入っていない。ところがある日突然、朝日新聞大阪本社の旧知の記者N氏が拙宅にあらわれ、同社では社外派遣の先例がめったにない記者が、関西学院大学「災害復興制度研究所」に転職を命じられ、それを受けたのでよろしくと、その経過を説明・挨拶に来たのである。立場は主任研究員、学長直属特別任期制教授である。驚いたのはその研究所の「支援の理念」に熊楠の「事の学」が記されていることであった。ここにその箇所を引用して他山の石としたい。

関西学院大学は、阪神・淡路大震災をはじめ、日本列島の各地に深い傷跡を残す自然災害の被災体験から教訓を紡ぎ出し、災害復興にかかわる新しい理念を構築するため、2004年1月に「災害復興制度研究プロジェクト」を立ち上げた。その研究所の研究の理念は「人間の復興」とするとされ、それは従来の災害復興の主体を「都市—空間の再建」「全体の復興」から「被災者の再生」「個の復興」に置き換えるパラダイムシフトを意味すると定義した。その中核となる「支援の理念」は、南方熊楠の「事の学」の思想が敷衍活用されているのには驚かされた。震災10年にあたる2005年1月17日には、その研究拠点として、「関西学院大学災害復興制度研究所」を設立。「Mastery for Service」(奉仕のための練達)の精神に則って、全国の被災地やNPO・NGO、他大学とネットワークを形成しながら、「人間復興」にふさわしい再生プログラムの研究を進め、21世紀への知的貢献を果たすと決意する。その決意の骨格は次のように述べられている。

支援の実定法を策定するにあたっては、「事の支援」に留意したい。「事」とは、「歩クエンサイクロペディア (百科事典)」との異名をとった和歌山出身の博物学者であり、民俗学者であった南方熊楠 (1867-1941年) の造語である。南方によると、「事」とは、「心」と「物」とが接して生じる人界の現象—つまり宇宙が生まれてからすべての「事」は一度しか起きない「今」だというのだ。被災者支援は、家を失えば「住宅再建支援」という「物」の支援、災害の恐怖にさいなまされていけば「カウンセリング」という「心」の支援という風に個別ばらばらで行われる。しかし、借家に入っていたラーメン店の経営者が家を失い、けがをして障害者となった。店の周りは区画整理で客層も戻ってこない。こういった「今」=「事」に着目した総合的支援にこそ着目して支援メニューを考えなければいけない。「事の支援」には、「今の現状」を救うということが大前提となる。「私有財産自己責任」や「焼け太りをつくるな」といったマイナス思考では真の復興支援はできない。

熊楠の「事の学」が生んだ思想の子供が、世紀を経てここに誕生したことを素直によるこびたい。